Interview

バイエルン州立歌劇場来日直前インタヴュー！

クラウス・フロリアン・フォークト

前回の来日時には「次は『タンホイザー』（ワーグナー《タンホイザー》）に挑戦したい」と話していたクラウス・フロリアン・フォークトが夢を叶え、去る5月21日、バイエルン州立歌劇場で同役デビューを果たした。同プロダクションで日本ツアーへの出発を半月後に控えた8月28日、フォークトはバイロイト音楽祭、ワーグナー《ニュルンベルクのマイスタージンガー》千秋楽の翌日なのに疲れも見せず、インタヴューの時間を1時間早めて爽やかに現れた。

取材・文・写真＝中 東生
Text & Photo=Shinobu Naka

歌う機が熟した《タンホイザー》

――6時間以上の長丁場で疲れも残さないのは何か秘訣があるのですか。

「歌う時に、常に『余剰』を加えないように心がけています。声楽的テクニックに沿って技術的に歌えば疲れないものですが、少しでも余計なものを加えると、声に雑音が入ります」

――今までの持ち役を越えて、「タンホイザー」を歌う機が熟したかどうか、判断した基準は何でしょうか。

「声が『この役を歌っても大丈夫』と感じさせてくれたからです。これまでにもオファーはありましたが、スコアを見て今回は感触がよかったので決めました。《マイスタージンガー》は喜劇的要素が強いぶん、軽さがありますし、ワーグナー《ローエングリン》は〈名乗りの歌〉がいちばん重いのですが、それが最後に来るので、それまでに十分、舞台上で声の準備ができます。でも《タンホイザー》は、最初の『ヴェーヌスベルクのシーン』がいちばん重く、舞台上に出てすぐにこの重い部分を歌えるかどうかが、僕にとっての判断基準です。もちろん、終幕の『ローマ巡礼のシーン』も重いのですが、モノローグ的ですし、第2幕でもアンサンブルを突き抜けるように歌わなければならない部分もありますが、実際経験してみると、何も特別変わったことはなく、今までと同じように歌えばいいだけでした」

キリル・ペトレンコと共演

――役デビューでペトレンコと共演というのはいかがでしたか。

「彼の良いところは、練習で追求したことが本番でも実現させられ、その練習過程が必須だったと証明されるところです。彼は隅々まで正確に、良い意味でほとんど神経質なほどの細かさで練習を積んでいきますが、大きなフレージングを見失わないのが彼の凄さです。彼はユーモラスで、情熱的で、細かい指示を沢山出すのに高圧的にならず、常に芸術に仕えているのです。またそのワーグナーは非常に室内楽的です。ワーグナーの音楽には、実はたくさんの*p*が書かれているのに見落とされていることが多いのですが、キリルは*pp*から*ff*まで忠実に再現します」

――それはまさに貴方の歌唱そのものですね。

ホルン奏者の経験が歌にも

――元ホルン奏者ということも、室内楽的な音楽へのアプローチを可能にしているのでしょうか。ホルンとの出合いから歌への転向過程を話していただけますか。

「ホルンを10歳で始めたのは、父の友人たちが吹奏楽四重奏団を結成するのに、ホルン奏者がいなかったため、楽器を父からプレゼントされたからです。14歳で彼らと活動を始め、16歳の時に先生が、ホルンで身を立てる才能があると評価してくれたので、喜んで勉強しオーケストラに入りました。20歳代半ばの頃、妻とは結婚前でしたが、歌を学んでいた妻からハウスコンサートでデュエットしようと誘われ、その時に義母が僕の歌の才能に気付いたので、声楽のレッスンを受け、初めて自分がテノールだと知りました。歌の勉強はホルンにも良い影響を与えたので、続けているうち、28歳のころ、歌手に転向する決意をしました」

――素人感覚では、吹奏楽器は、横隔膜などの呼吸器は歌と同じような使い方をしても、「吹く」という圧力のために、歌うのに弊害を与えるような場所に力が入ってしまうような気がしていましたが……

「実を言うとまさにその通りで、両立しているうちに、ホルンが歌に悪影響を与えることに気付き、決断を迫られたのです」

いまや世界トップの「ヘルデン・テノール」と言っていいフォークトは、元々はハンブルク・フィルのホルン奏者だった

Klaus Florian Vogt speaks about Wagner and Horn

これまでにも《タンホイザー》のオファーはありましたが、スコアを見て今回は感触がよかったので決めました

――歌を選んだ決め手は何でしたか。

「冒険が好きだから、かな（笑）」

――だから、バイクやヨットや飛行機操縦まで冒険的な趣味をお持ちなのですね！

「でもバンジージャンプは必要ありません。舞台に出る方がもっとアドレナリンを出せるから（笑）」

――ホルンが懐かしくなりませんか。

「ホルンは今でも吹いてはいますが、歌手はグループ単位で行動しない点が寂しいです。また、ブルックナー『交響曲第8番』や『第9番』は特に好きだったので、今でも聴くと哀しくなります」

――でも、ホルン奏者の耳が貴方の声を作っているのだと思います。ホルンは様々な音色が出せるから、自分の出したい音を明確にイメージすることが大切と聞きました。

「そうですね、ホルンは繊細で、管が長く、各音のポジションも近いので、吹く前のイメージが大切です」

――まさに、昨日の〈栄冠の歌〉でも、歌い出す前に音がはっきりと見えていて、その音が貴方の方に向かって来て、貴方もその音をつかまえに行きながら、最初の音を完璧に出していたのが見えました。

「よく見えましたねえ。その通りで、音とイメージが一緒だと実は遅いのです。飛行機の操縦でも、パイロットは操縦席の外に座っているような感覚が必要なのです」

来年も演奏会形式の《ローエングリン》と「リーダーアーベント」で来日されるので、さらなる飛躍が楽しみだ。

インタヴューはバイロイト音楽祭の千秋楽の翌日に行われた

■公演情報

バイエルン州立歌劇場
2017年日本公演《タンホイザー》

〈日時〉9月21日15時／25日15時／28日15時〈会場〉NHKホール〈指揮〉キリル・ペトレンコ〈演出〉ロメオ・カステルッチ〈出演〉ゲオルグ・ツェッペンフェルト（領主ヘルマン）、クラウス・フロリアン・フォークト（タンホイザー）、マティアス・ゲルネ（ウォルフラム・フォン・エッシェンバッハ）、アンネッテ・ダッシュ（エリーザベト）、エレーナ・パンクラトヴァ（ヴェーヌス）、他〈問合せ〉NBSチケットセンター 03・3791・8888

http://www.bayerische2017.jp/tannhauser/